

一日

— 反原発10月行動月間 —

向井 孝

10月10日。〈コスモス原稿メ切り〉とかいたメモ紙が、ピンでとめてある。(けれど、まだ一行も手をつけていない)となりの部屋で、しきりに紙をさばく音。輪転トリーシャ盤をまわす音。

0時10分すぎ。「さっき帰ってきましたので

」と、働く仲間の会のナカモくん来る。

死刑制度撤廃、監獄法と獄中弾圧問題などを問題とする集会を、来年1月24日をめどに準備したい、という。

かえりがけに、「きみのニックネーム、左門いうんやてなあ。そっくりの感じやで」と言う、はざかしそうな、すこしうれしそうな顔で、礼儀正しく「エエ」といつて笑った。

1時まえ。ふうさんが、刷りあがった〈ウリ

ニュース92号〉を、一枚みせにくる。印刷の音がやんで、まわり一面から、虫の声。「のぞみくんは？」「いま〈実行委ニュース4号〉のガリきってるわ」

2時10分。ニュースの〈折り〉千枚を終る。

「あー、眠むとなってきた。おやすみ」と、ふうさんいなくなる。

3時20分。〈電気料金不払い連〉パンフのファックス用原稿かき、ようやく六枚目。あとはもう明朝にしよう。

3時40分。ポストまで手紙を入れに行く。石段の崖をのぼって、タバコを吸いながら、楠の木ごしの夜空をみるのは、いい気分。

のぞみくんの窓、まだ明りがついている。

4時。コスモスの原稿、まだ一行もかいていない。寢床に原稿紙をひろげて、気がつく、ねていた。

9時50分。「あつ、ねすぎた」とふうさん、

ばたばた大あわて。今日は〈女グループ〉がが〈10・21反原発秋祭り〉の展示パネルを、みんなでつくる日。だいぶおくれて〈共同小屋〉へ。

10時40分。いつ子さんから電話。「カギ間違えて、開かへんねん。もう三人も来て待

ってる」「そんなら、××で××して××してみ」

5分ほどして「開いたわア」と電話がくる。「そう、よかったネ、という声が、とてもやさしかった。おひちゃんあのん声きいたことない」と、のぞみくんがもぞもぞ起きてきた。

11時50分。のり子さん、発送作業の助っ人に、来る。「おひるまだやるおもて、栗ごはんもってきたよ」「うわあ、ぼく一ぺん、腹一ぱいたべてみたかってん」と、のぞみくん。

「ええ味や。おかずいらんわ」「お母ちゃんがつくってん」「そろそろやろ」「わたし

かてグラタンやつたら自信あるよオ」

12時10分。よしむらくん、秋祭りのピラ千枚を刷ってもってくる。「きようは、ホンマにエエ天気や。ちよつと買物にいつてきてから手伝うわ」

12時20分。〈折り〉の助っ人にこんだくん来る。

のり子さんの机の上のピラ束をみて、「うわあー、たくさんあるなあ」「きみ、ひるごはんは？」「ヘエー、たべてもかめへんの、栗ごはんなんて十年ぶりや」

殺気

高島 洋

親戚の葬儀を終って

帰路であった

気付かぬうちに気をつかっていたらしく疲

れていた

駅は混雑していた

両手に大きなバッグをさげて

駅の階段をのぼりはじめた

前後左右、あるく人ばかりで停止もできなかつた

と、若者がふたり うしろから

わたしのバッグをけりあげるようにして、前方へ走りこんだ

とつぜん、心頭に怒りがこみあげ

わたしの体じゅう電流のように殺気のようなものが走った

それから、今朝の新聞で見た若者の衝動殺人をおもった

わたしはもう急がないことにした

急にのろろ歩くわたしの

うしろから、女房が

お父ちゃんも年やねえと あるいてくる

13時。よしむらくん帰ってきて〈不払い連ニュース9号〉の片面を刷りだす。

14時20分。「あつ、忘れてた！」とぼく。原

版つくりを中断して、13日集会の案内ハガ

キの宛名書きを約百枚。ついでに昨日、今日

きた手紙類の緊急分だけの処理。

16時10分。共同小屋のふうさんから電話。

「おいちゃん、もう発送用封筒書き、すんだ？」「まだ、そこまで手が届けへんねん」

「そしたら、夕方までで抜けて帰るか」

18時20分。「あーあ、お腹へってきたなあ」

ファックス用原稿をやつと終了。しかし表

紙、題字、カットなどはまだ。

18時30分。夕食つくりの間がなかったので、

カマの「沖繩そば」をたべにいくことにき

める。よしむらくん「よおし、ぼくがオゴ

ルぞ」「五人もやでエ」そこへふうさんが

帰ってきて六人。

10時30分。り子はん、あゆみちゃん、れい

こさんがきていて、ピラを折ってる。

こんだくんとふうさんは封筒かき。

21時20分。ふじ子さんとリン、友人を連れて

「こんばんわ」と顔をみせる。ぶどうがお

みやげ。

「カマのなかを案内しながら通ってきたの」とふじ子さん。「カマをみて彼は、ひどいとか、悲惨という感想をもたなかった」とリン。

「その感想は率直で、ある程度あたっているとおもう」とぼくは言う。

それから、ふじ子さんの通訳で、カマの歴史と現在の変遷をはなす。話しながらピラを折る。みんなマネをして手伝う。

22時30分。リンら三人帰る。さよならの握手。

22時50分。り子はん、よしむらくん、こん

だくん、れい子さん、のり子さん帰る。よ

うやく出来上った印刷物6種類をならべて、

封筒入れ開始。

23時30分。あゆみちゃん泊ることになる。部

屋中、封筒の山。出来たのをボンと投げる。

「郵便局で、ボンボン投げてのん、よう

わかるわ」

24時。まだ封入中。実行委関係二五〇通、ウ

リ関係五〇〇通、その他一五〇通。

コスモスの原稿、まだ一行もかいていない。

道頓堀にて

近藤 計三

とにかく暑かったなあ。
太左衛門橋を渡って
難波新地に這入っていったから
あれは料理旅館だったのかなあ。
ぎよろんと眼を剥いて
床の間を背にしていた。
開け放された窓の向う
道頓堀の川筋はみえてたのかなあ。
がむしやら三、四人で訪れ
廊下が迷路の想いで
同志じゃないかと
学生の特権まるだし訴えた。
いまにしてみればお笑い草の甘えなんだ。

無神じゃなくて無関心で
それでいて神の啓示のごとく
いがみあう日共のリンチ事件も
やはりどこかで甘えの暴力が
怨念をかきたてていたのだ。
あれから二十七年か。
ひしめくネオンの彩色だけがからまって
俺は夢にあの旅館をさがすが
甘い糖衣の客引きの声ばかりだ。
ぎよろんと眼を剥いて押し黙り
茶が運ばれてくると
〈ビール！〉と叱咤のように注文した
こもるような声が俺の夢を破る。
あれは警告と拒絶だったような気もする。
あのとき俺は詩人・Nと政治家・Nのどちらをみていた
のか。
もうろうと老けてたなという記憶だけが
川面の泡ぶくみたいに浮いてくる。
そういえばこの辺り
詩人・Oの母も亡くなったところだなあ。

不忍池

— 加藤千香子さんに

伊藤 正 斉

糞をたれて
手を洗はないのは
すぐ泥水に手をつっこむので
洗はなくてもよいと思い。
大腸菌のついた手で壺を作る。
糞壺
蛸壺
痰壺
骨壺
○
あかあかと東京の夜景。
大震災の

大空襲の
東京の空。
西郷さんの夜の森から
暗い池の端の道を歩く。
しばらく歩くとあかるい通りへ出た。
池の端文化センター前。
先進国の男女が歩いている。
後進国からもってきたコレラが
そこらをうようよしているから気をつける。
営業停止。
ひっそりと
店を閉じている文化センター。
ホッケというホテルの十階の部屋で
ウイスキーでコレラをおっぱらった。
寛永寺の鐘か。
まだ酔っているめざめ
しづかであたたかい冬の朝だ。
不忍池は
うつすらと霧がかかり
鴨が群らがつている。

平和島

長谷川七郎

“平和島” Sentosa かつて“死の島” Blakang Mati と
よばれた——Apa ガイドブック

崖つぶちや 草むらから
隠し絵のように のぞく砲身
使えそうなものもあるが
前世紀 それ以前のもある
迷路さながら 地下壕が走る
全島ベトンの要塞島
その上にいま 白砂が積まれ 椰子が植えられ
ブーゲンビリヤ ハイビスカスの紅が映える
人っ気のない人造海水湖で オレが泳ぐ
故郷を知らない現地生れ インド人踊り子二十五才
身についた素振りで
黄色いサリートをぬぎすてる
象牙色で黒くない肌
むしられた ランブータンの果肉に似た

つやのある 素っ裸がこぼれる
しまらない面付きだが 底ぬけの陽気さがいい
鼻さきをくすぐる うすい腋臭
旧海軍以来 越中フンドシの吹きながし
オレ
違和感はない

木立ちにおおわれた 浜からつづく窪地
アリ地獄のように
ひっそりと棲息し
西ひがし 行き交う空の電波を
強引にひきずりこむ
巨大なエレクトロニクス
圍繞する有刺鉄線にはり付いた
独立祭を祝う 万国旗のなごり
澱んでうごかない
熱帯の空気を切り裂き
青カンの頭上をかすめる
戦闘機編隊の轟音

詩 五つ

緒方宗平

またそれを見た。
バイクを走らしていると
人だかりがあった。
のぞくと女の人が掌で額をおさえてかがんでいた。
パトカーがきた。
ピーポピーポ急救車がきた。
そして女の人をはこんでいった。

大通りをそれて
横道にはいると
目のまえに自動車があった。
あはててブレーキを踏んだ。
ここで鉢合せになったら
この道をえらんだ
バイクのおれはどうなるか。

ウイン会議
サミット会議
OPEC会議

映画があつたな
そのタイトルは
会議は踊る。

道ひとつへだてた
まむかいの竹垣のうえの
ピンクの花は万をかぞえるだろう。
淀川つつじ。
樹齢百年を経ようというしろもの。
らいねんも見たいといつていた女は
昨日ガンで死んだ。
なかまの一人は病院へ。
朝からのしとしと雨は
午後になつてもふりつづく、
出棺にはまだまにあうだろう。

○
猛宗の竹林のなかに
あじさいの二株。
青白い集合花と大きめのみどりの葉。
手足をのばして
おもうぞんぶんに生きているという感じだ。
しげみのなかで雨にぬれた女の人がまねく。
二人の子供をのこしてガンで死んだ
若い母親である。

父親恐怖症

菅沼瞭子

手許に残された一葉の顔写真。

三十三歳のアトリエでの父。もう一葉は

三十数年前の国電お茶の水付近の風景。

これは父の撮ったもの……堀に一艘の木船

を浮かべた父の友人が艦に佇んでいる。

明治の時代に生まれ育った父には

明治の文化の重みがズッシリ。

ハンコ造りの父の父親は

息子を職人でなくゲイジユツ家にしたかった。

和魂洋才を地で生きたわたしの父親は、

落語を聞かずベーターヴェンを愛した。

やっと生まれた彼の息子は、

生後八日にして病死した。その後、

つぎつぎと生まれたのは女兒ばかり。

家庭に居たたまれなくなつたから、このエゴ

イストはお茶の水ニコライ堂近辺にアトリエ

エを持ち、わたしたちを置き去りにした。

一九五一年、

父と母は凄まじい言い争いをした。
姉妹はどちらかを選ばなければならなかった。
わたしは父を選んだ。わたしだけが。

その時から今日まで二十八年間
わたしは父を選び通してきた。
父に優る男はまだ居ない。

何故、父なのか？

お正月にトルコブルーのオーヴァーを買って
くれた（家には糯米さえない正月だった）
からではない。

父の喫っていたピースの香りでもない。

父の愛したイギリス製のセピアカラーの背広

の世俗性でもない。

父が母を棄てたからでもない。

結核の額を揉んだ時の、あの爬虫類の感触で

もなく

父がわたしを姉妹のなかで一番愛したからで

もない。

わたしは父が怖い。

わたしの内に父が巣喰っていて

なかなか出ていつてくれない。

遠視の父の視力が私に移され、

わたしには近くのものがますます見えない。
Xという名の男と眠っていて
Yという名の男の名前が夢に現われる。

わたしは一九七九年に生きているのに
わたしの血は父の時代を漂流している。

一九七八年夏の恋人は六十九歳であった。

この秋の、二万キロ離れた地にいる恋人は三

十一歳になろうとしている。

再び父の顔写真に眼を向ける。

「もう、離れていつて欲しいんだけど……」

「わたしは、いま生きている人間と一緒に居た

い。わたしを憎まずに、分析しないでそばに

居てくれるひとと一緒にいたい」

ソッポを向いて、口を一文に結んだ父は、

何とも答えてくれない。

メタフィジカルな意味で、わたしは母親殺し

をした、十九歳の時に。

いつ、

私に父親殺しができるのだろう。

(一九七九・九・二二)

すすり泣き

村松武司

生きるってことには、水の中を泳ぐときほど

の

息ぐるしきはない。

だが、歯医者椅子で口をあけ

眼玉を裏返して仰向かされるとき

ドリルのなかで、とつぜん

のどの奥にむせぶものがある。

かなしみにそしらぬ顔で生きていた

泣き声がいつからはじまり

心を注がれなかった人生を泣きつづけてきた

か。

試験に落ちた日はその足で盗みにゆく

女とわかれた日は散髪

肉親が死んで、夜、庭で落葉を焚く。

わたしの職場であつた会社が倒産した

その日どうして海辺の掛茶屋にいたか

夕暮のほうから、くさい泥濘が迫つて

わたしは金鯉を追いつながらむやみに蛤を食う

盗みをして愉快

散髪して、掃除しても愉快

嘔吐して、蟹が匂いでできても愉快

かなしみをこわしてまるで愉快

わたしのなかに奇妙な友人がいる

除名されたとたんに変装好きになつて

黒いメガネをかけ、夜つづいて歩いてた

非合法時代はすぎさつてはるか彼方

ときどきふり返つたり

追跡者もないおのれの仮構をしんから悲し

む。

この夢想家と

深夜の町で酒をくみかわすことがある

グラスの中に釣糸を吊れるように

人差指を漬けたまま、たつぷり眠る道化役の

寝息のなかに

あの奇妙な喘鳴をきく。

それらの声がいま、せせらぎのように枕の中

を流れ

いつからはじまつたのか、いつ終るのか

しだいに高まり、わたし自身も覚えのない

すすり泣き

やがてしわがれて咳きこんだり――。

路地の奥を急ぎ足で駆けてゆく

女の下駄のかん高き

冬の夜だね、風が吹いているよ

幼児のわたしが息をつまらせて死ぬよ

風がやむ、嗚咽はつづく

おれはそれでも気付かずに寝返りなど打ち

夢のなか

ついに会おうことのないわが人生に

背を向ける

年内誕生!!

菅沼瞭子の

『一九七九年詩集』

コスモス社
三千円 二五〇円